

漢文の構造分析における小学校教科書の意義

—— 思考力を養う漢文教育のために ——

土屋 聡

一、漢文の構造分析についての従来の見方

漢文の文構造について学習する際、二字から成る熟語を挙げながら、その構成要素や構造の類型を提示することは、現在では、ほぼ常識的な解説法と言つて良い。

その目的は、「入門指導における構造の説明は、主として国文との語序・語順の相違を指摘して、訓読法、特に返り点の由来を述べるためのもの」^②であり、「漢語の熟語、とくに漢字二字から成る熟語については、漢文の入門期などに指導する機会が多い。その目的は、熟語の構造そのものを理解すること、そして、それと関連づけながら漢文そのものの文構造を理解してゆくこと、の二点に集約でき^③る」とされる。

熟語の構成は、小学校や中学校においても学習するようであるが、確かに、そうした学習成果を利用することができれば、高等学校における本格的な漢文学習へのスムーズ

な導入となるであろうし、何よりも漢文の読解そのものに極めて有効であろう。

しかしながら、多くの先行研究によってその重要性が指摘されているにもかかわらず、学習者の間には、漢文の文構造を理解することが、未だ定着していないように見受けられる。この問題は、様々な要因が絡まり合った結果であるように思われるが、本稿は、ひとつの試みとして小学校教科書の持つ重要な意義を再確認し、そのことよつて解決への道筋を探らうとするものである。

二、熟語の構成に関する学習効果の検証

これまで論じられてきた熟語の構成についての学習が、漢文の読解にどの程度有効であるのか、また学習者の間にもどの程度定着しているのかを明らかにするために、大学生108名を対象として、次のような調査を行なつた。^④

1、漢文の文構造について全く説明を行わずに、白

文を提示し、書き下し・現代語訳を書いてもらう
(第1回目)。

2, 書いてもらった書き下し・現代語訳を回収した後、
熟語の構成や打ち消し語の語順と関連づけながら
漢文の文構造について解説をおこなう。

3, 一週間後、全く同じ白文について、書き下し・現
代語訳を書いてもらう(第2回目)。

なお、ここで提示したものは、『論語』里仁篇の次の文
章である。

我未見好仁者惡不仁者。

(我れ未だ仁を好む者不仁を惡む者を見ず)

この文章を使用した理由は、次のふたつの点で、適度に
複雑な構造を取っているためである。一点目は、「好仁
(者)」「惡不仁(者)」という述補構造を持つ二語が、文
全体の述語である「未見」の補足語となっている点である。
二点目は「未見」「不仁」というふたつの打ち消し語が、
前者は文全体の述語として、後者は補足語に含まれるもの
として、異なるレベルで用いられている点である。

したがって、正誤判定も、「二重の述補構造を理解でき
ているか」「打ち消し語の語順を理解できているか」とい
う観点から行なった。結果は、以下の通り、第2回目的の正

解者が増加した。

第1回目に正解した者……11/108名
第2回目に正解した者……55/108名

したがって、熟語の構成についての解説が、漢文の読解
に有効であることは、あらためて確認されたと言って良い
であろう。

なお、第1回目の後に行なった解説では、ひとつの工夫
として、小学校教科書の参照利用を試みた。その理由は、
次節で述べるように、小学校・中学校教科書に見られる解
説が、熟語の構成を考える上で極めて的確な方法を示して
おり、簡潔で判りやすい参考書の役割を果たすと考えられ
るためである。⁷⁾
ところで、この調査時に、併せて「高校生の時に、漢文
の文構造に関する授業を受けたか」という質問をおこなっ
た。この質問に対する回答は、次のようであった。

A. 高校で漢文の文構造について学習した者……17名
B. 高校で漢文の文構造について学習したが、内容を
覚えていない者……33名
C. 高校で漢文の文構造について学習していない者
……38名

D. 未回答……………20名

実際には、記憶違いの場合もあるであろうし、内容をどこまで覚えてるかという程度の問題もあるため、右の回答が高等学校における授業実態をそのまま反映していると言いはない。しかし、それでもB・Cに属する者が多数を占めていること(71/108名)は、注目に値する。この数字は、漢文読解に当たって文構造を全く意識しないことの方が、むしろ普通であることを示している。

さて、以上の結果から、熟語あるいは漢文の文構造を理解することがその読解に有効であるにもかかわらず、肝心の学習者の間にそれが定着していない、という問題が読み取れる。その一方で、熟語や漢文の文構造を知ること、あるいは思い出すことによって、正解者は確実に増加することであり、それはこの問題が決して恢復不可能ではないことを示唆している。

三、小中学校における熟語の構成についての学習

熟語の構成についての学習は、小学校・中学校において段階的に設定されている。いわゆる漢文入門期の学習は、本来、小中でのそうした学習成果を活用しておこなわれるものである。

しかし、前節の調査結果からは、本来あるべき連繋がう

まく機能していない可能性が考えられる。そこで、まず第三節では、小中学校の教科書における熟語の構成の学習内容について、その特長を確認する。次に第四節では、その内容が高校での学習にどのように繋がっているかを見ながら、問題の原因を探ることとする。

まず、現行の小学校・中学校教科書を見ると、全ての教科書で熟語の構成についての学習が設定されている。

【小学校国語教科書】

学校図書 4年下 「熟語1―反対の意味の漢字の組み合わせ」22～23頁

「熟語2―にた意味の漢字の組み合わせ」34～35頁

「熟語3―同じ読み方の熟語」74～75頁

「二字の熟語の構成」30～31頁

「漢字三字以上の熟語の構成」118～119頁

教育出版 4年下 「熟語のでき方」72～73頁

5年上 「熟語の構成」87～88頁

6年上 「三字以上の熟語の構成」37～38頁

三省堂 4年 「漢字の足し算」106～107頁

5年 「言葉の構成」70～71頁

6年上 「漢字の足し算」106～107頁

4年 「漢字の足し算」106～107頁

5年 「言葉の構成」70～71頁

6年上 「漢字の足し算」106～107頁

4年 「漢字の足し算」106～107頁

5年 「言葉の構成」70～71頁

6年上 「漢字の足し算」106～107頁

東京書籍 5年 「熟語の構成を知ろう」 162～163頁

6年 「熟語の構成を考えよう」 48～49頁

光村図書 4年下 「熟語の意味」 92～93頁

6年 「熟語の成り立ち」 86～87頁

開始時期は様々であるが、概ね高学年の複数年次に涉つて学習するものであることが判る。

また、中学校教科書も、次のように設定されている。

【中学校教科書】

学校図書 2年 「熟語の構成」 209～211頁

教育出版 1年 「熟語の構成」 188～189頁

三省堂 2年 「熟語の構成・熟字訓」 48～49頁

東京書籍 3年 「熟語の構成・熟字訓」 58～60頁

光村図書 2年 「熟語の構成」 39～40頁

次に、その内容を見てみよう。例えば、東京書籍・小学5年「熟語の構成を知ろう」では、漢字二字の熟語の類型として、次の五種類を紹介している。

- ① 似た意味を表す漢字を組み合わせた熟語
- ② 意味が対になる漢字を組み合わせた熟語
- ③ 上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明している

熟語

- ④ 上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表す熟語
- ⑤ 上の漢字が下の漢字の意味を打ち消している熟語。

同社の中学校教科書の場合は九種類に増えるが、それは右の五種類を基本として、分類を詳細（例えば修飾語を連体修飾・連用修飾に分ける）にし、項目を追加（例えば主語＋述語の関係）したものであり、内容自体は概ね小学校での学習の延長線上にある。これをまとめると、次の表の

【表】

小学校「熟語の構成を知ろう」 にた意味を表す漢字を組み合わせた熟語	中学校「熟語の構成・熟字訓」 二字が似た意味を持つもの	漢文の文構造 並列
意味が対になる漢字を組み合わせた熟語	二字が対になるもの	
上の漢字が下の漢字の意味をくわしく説明している熟語	主・述の関係にあるもの	主語＋述語
上の漢字が動作や作用を、下の漢字がその対象を表す熟語	連体修飾・被修飾の関係にあるもの 連用修飾・被修飾の関係にあるもの	修飾語＋被修飾語
		主語＋補足語 (目的語・補語)

	上の漢字が下の漢字の意味を打ち消している熟語	接頭語・接尾語が付くもの	
		同じ漢字を重ねたもの	
		長い語の一部分を省略して短くしたもの	

ように示すことができる。

熟語と漢文の文構造とを見比べてみると、確かに両者は同じものであり、小中学校での学習内容が、最終的に漢文の文構造の学習へと展開されるものであることが判る。

但し、⑤上の漢字が下の漢字の意味を打ち消している熟語は、やや特殊であり、通常は漢文の文構造には含まれない。しかし、打ち消し語を含む熟語がここで取り扱われていることも、漢文の学習への連繋という観点から考えれば、却って好都合である。というのも、漢文入門期において、「未」や「不」の取り扱いは極めて複雑なためである。多くの場合、返り点の解説に続いて、「未」は「いまだ＋くず」と読む再読文字であり、「不」は返読文字であるという説明がなされる。しかし、それは訓読する上で返り点を使用する必要のある文字という視点からの分類であって、意味内容の上から言えば、「未」「不」ともに打ち消しを表す語であることに違いはない。しかも、常に再読や返読されるわけではなく、例えば、「不義にして富み且つ貴きは、我に於いては浮雲の如し（不義而富且貴、於我如浮雲）」（『論

語』述而）の「不義」のように熟語的に読まれる場合もある（前節の「不仁」もそうである）。だとすれば、まず「不満」「未着」などの熟語から示しておいて、「不_レ満_ッ」「未_ダ着_カ」のように分析的に読むこともできると捉えた方が、「未」「不」がともに打ち消しの働きをすることや、打ち消す対象が必ず後置されるという語順を理解しやすくなると思われる。

さて、筆者は高等学校における漢文の学習に際して、小学校教科書の価値を再評価しようとするものであるが、その最大の理由は次の点にある。以下に、小学校教科書の解説文を引用する。

○熟語には、それぞれの漢字の意味がふくまれています。（学校図書5年上）

○二つの漢字の意味を手がかりに、「読書」という熟語の意味を考えましょう。熟語は、その構成に着目すると、おおよその意味をすいそくすることができる場合があります。（教育出版5年上）

○訓で読むと意味がわかりやすくなるね。（イラストのふきだし）（三省堂4年）

○意味が分からない熟語でも、漢字一字一字の意味と熟語の構成を考えることで、大体的意味をおしはかることができます場合があります。（東京書籍5年）

○熟語には、「等分」「等しく分ける」のように、訓で読むと意味の分かるものがあります。

(光村図書4年下)

ここで述べられていることは、熟語を構造的に読み解くための簡潔的確な方法論である。まず、訓読みすることによって熟語を構成する各語の語義を把握し、その上で語と語との関係をいくつかの類型と照応しながら考え、最終的に熟語の意味を推測する、というのである。

『高等学校学習指導要領解説国語編』(二〇一〇年、教育出版。以下『指導要領解説』と称す)に拠れば、「思考力」とは、「言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力」と定義される(10頁)。だとすれば、以上に見てきた熟語の構成についての学習は、まさに思考力を養う基礎訓練となるものではないか。国語の学習の中では様々な場面で、思考力を養い伸ばすことが求められるが、漢字一字一字を一定の造語原理に則って関係づけてゆくという熟語の学習も、確かにその中のひとつに数えられるのである。筆者が重んじる所以である。

ところで、前節で示したように、今回の調査結果からは、本来想定されている小中学校から高等学校への学習内容の連繋がうまく機能していないのではないか、という可能性が窺われる。そこで次節では、以上のような小中における熟語の構成についての学習が、高校での漢文学習にどのよ

うに繋がっているのかを見てみよう。

四、高等学校の漢文における小学校教科書の意義

ここで、高等学校『国語総合』の教科書を見てみると、各教科書ともに、その導入部分において何らかの形で漢文の構造についての解説がなされている^⑩。また、幾つかの教科書では、熟語の構造をも併せて記載しているが、それらの目的とするところは、返り点が使用されるようになった経緯の説明である。言うまでもなく、漢文の構造は日本語と異なるものである。各教科書の説明を見てみると、述語が補足語の前に置かれることや、打ち消しを表す語が述語の前に置かれるなど、日本語の語順と異なる点を強調している点が共通している。

それでは、実際に漢文を読んでゆくに当たって、どの漢字が主語・述語・補足語として機能しているのか、それをどのように判別すればよいのであろうか。

このことについては、一応つぎのように考えることができるかもしれない。すなわち、『指導要領解説』に、「訓点を付けて読みやすくする必要がある」(38頁)とあるように、高等学校においては、主に訓点つきの漢文を読んでゆくのであって、返り点や送りがないは読解のための大きなヒントとなる。したがって、ひとまずは訓点に従えば文意は把握できる、と。しかし、そうしたヒントを利用することから

始まったとしても、最終的には、学習者の内に自らが依拠すべき原理原則を確立する方向に進むべきであろう。

そしてまた、訓点そのものの性質として、先人の読み「結果」を示している、という点にも改めて留意しなければならぬ。

例えば、「登竜門」という文がある。周知の如く「登^ル竜門^ニ（竜門に登る）」と読む。それでは、なぜそのように読めるのか。まず「登」は高い場所（地位を含む）へ移動する意の動詞である。次に「竜門」は地名（現在の陝西省韓城市）である。したがって「竜」と「門」とは不可分であり「登^ル竜^ニ」や「登^ル竜」という読み方はできない。さらに、その「竜門」は黄河の難所として知られ、魚がその難所を遡上すると龍に変化するという伝説があり、そしてまた、その伝説を後漢の人々が時の名士李膺の知遇を得ることに喩えたという故事がある。「登」と「竜門」との関係を考える場合、これらの情報を踏まえた結果として、「竜門（補足語）」に「登（述語）」る、と判断するのである。

訓点は、右のような思考の過程を省略して、結果のみを提示したものである。したがって、訓点つきの漢文を読む限りは、その文構造を学習者が自ら考えて判断する必要はない。だとすれば、意識的な指導が継続されないかぎり、学習者は文構造を考える練習を積む機会はないのである。

本稿が問題としている、漢文の構造分析が定着しない原因は、この点にあると考えられる。

同時に、この点にこそ、もういちど小学校教科書を振り返る意義があるように思われる。とりわけ、学習者に思考を促すという観点から見て、小学校教科書が具体的な方法論を明示しながら、熟語の意味を推測させようとしていることは見逃せない。なぜならば、前節に引用した小学校教科書の解説文は、単語の語義を捉え、語と語との関係を考へ、文意を推測してゆく、という「漢文を読む」ことそのものに置き換えることができるであろうが、学習者は、このような方法に習熟することによって、一定の原理原則に依拠しながら論理的に漢文を理解できると考えられるためである。

とはいえ、入門期の学習者は、訓読の様々なルールを覚えなければならぬ。そのため、手際よく整理された現行の高等学校教科書には、もはや立錐の余地も無い。ここに新たに構造分析までも詰め込むことは、恐らく不可能である。しかし、定着を図るには、反復学習することが肝要なのであって、入門期に限る必要はない。次節には、そのための提案を述べてみたい。

五、漢文学習の中の構造分析

本稿では、前節までに見てきたように、漢文の構造分析

の重要性が指摘されておりながら、学習者に定着していない、という現状の問題を明らかにしてきた。

これまで多くの先行研究によって指摘されてきことであるが、熟語の学習を通じて漢文の構造の説明をおこなうことは、興味づけや判りやすさなどの点で、効果的な指導である。本を読むことを「読書」と言い、安心できないことを「不安」と言うなど、本来の日本語文と異なる漢文の構造が既に身近な言葉として存在している事実には、我々は確かに新鮮な驚きを覚える。しかしながら、それは入門期に限定されるのではなく、我々が漢文を学習する中で常に振り返り、読解に躓いた時にはいつでも立ち戻るべき基本として位置づけるべきであろう。

ここでは、文構造を随時に意識しながら反復学習するためのひとつの提案として、実際に漢文を読み進める中で登場する熟語に注目したい。というのも、訓点を附した漢文においても、通常、熟語は熟語のまま音読みされるため、その分析は入門期以後の学習者にとって適当な分量と難度と考えられるためである。のみならず、そうした熟語を詳しく読み解くことによって、より深く文意を理解することも期待できる。以下に幾つかの例を挙げる。

子曰、「巧言令色、鮮矣仁」。

子曰はく、「巧言令色、鮮し仁」と。

『論語』のこの章では、通常「巧言令色」を音読みする。そして、語注や現代語訳によってその意味内容が補足されることが多い。確かに、本文の理解を助けるという観点からすれば、豊富な語注や現代語訳は便利である。しかし、この四字はそれぞれ「言（補足語）」を「巧（述語）」にし、「色（補足語）」を「令（述語）」くする、という構成要素に分解することができ、その構造を考えてみることにしても、文意を推測してゆくことができるのである。

次に、我が国『先哲叢談』巻二「野中兼山」を見てみよう。

兼山笑曰、「此不獨饋諸卿、使卿子孫亦飫之也」。自此後果多生蛤蜊。遂爲名産。衆始服其遠慮。

兼山笑ひて曰はく、「此れ独り諸を卿に饋るのみならず、卿の子孫をして亦たこれに飫かしめん」と、此より後果して多く蛤蜊を生じ、遂に名産と爲る。衆始めて其の遠慮に服す。

江戸から運んできた蛤蜊を全て土佐の海中に投じた野中兼山の行動は、これを繁殖させることによって、利得を子孫にまで及ぼそうとしたものである。したがって、「遠慮」は、現在のような辞讓の意ではなく、将来まで見据えた「遠慮」（修飾＋被修飾）であると捉えなければならぬ。このことに気づけば、同時に、この語が『論語』の「人

に遠き慮り無ければ、必ず近き憂ひ有らん（人無遠慮、必有近憂）に基づくものであることも明らかとなり、学習の幅が広がるであろう。

さらに、白楽天「長恨歌」に至っては、構造分析を試みることによって、より理解が深まる表現に満ちている。

- 1 漢皇重色思傾国、漢皇 色を重んじ 傾国を思ふ
- 2 御宇多年求不得 御宇 多年 求むれども得ず
- 3 楊家有女初長成 楊家に女有り 初めて長成す
- 4 養在深閨人未識 養はれて深閨に在り 人未だ識らず

「傾国」は、「国（補足語）」を「傾（述語）」けるほどの美人の意である。これは、前漢の李延年が、自らの妹である李夫人を武帝に勧める「歌」に「一たび顧みれば人の城を傾け、再び顧みれば人の国を傾く。寧ろ知らざらん傾城と傾国と、佳人再びは得難し（一顧傾人城、再顧傾人國。寧ろ不知傾城與傾國、佳人難再得）」と詠じており、美人を形容する語として知られている。しかし、ここでは「傾国」＝「美人」という図式を当てはめることよりも、「国を傾ける」という語感が一方で持つ危険な響きを、学習者が感じ取るこのほうが重要と思われる。周知の通り、唐王朝は安史の乱によって転覆の危機に直面することになる。そ

して、「長恨歌」ではその事件をきっかけとして、楊貴妃の悲劇的な死や玄宗の懊惱、仙女太真（楊貴妃）の回想、と展開しながら、それでも変わらないふたりの強い情愛が描かれる。とすれば、「国を傾ける」は、天下と引き換えにしてもなお惹かれあう「長恨歌」の恋愛のかたちを、早くも冒頭において予見させるものと言えよう。

- 5 天生麗質難自棄 天生の麗質自ら棄て難く
- 6 一朝選在君王側 一朝選ばれて 君王の側に在り
- 7 迴眸一笑百媚生 眸を廻らせて、笑すれば 百媚生じ
- 8 六宮粉黛無顔色 六宮の粉黛 顔色 無し

「天生」は、「天が生みだす」という主述構造であり、かつ下に続く「麗質」を修飾するものである。この場面では、単に生まれながらの美しさを述べたものと考えられるかもしれないが、「長恨歌」後半において「中に一人有り字は太真、雪膚花貌参差として是れなり」（第87～88句）という仙女として再登場する時、我々はこの冒頭部分の伏線に気づかされる。つまり、ここに「天が生みだした」とされた楊貴妃の美しさは、人間世界のそれとは隔絶するものだったのである。その凄味は、さらに第7・8句に続くことによって一層鮮明となる。

「一笑」「百媚」の「一」「百」という数字は、それぞれ「笑」「媚（＝美）」の修飾語として、その程度を量的に表す。すなわち、楊貴妃がちらりと笑うとあふれるほどの美しさであった、という。また、「粉黛」は、通常は「粉」と「黛」という化粧を意味する語であるが、ここではそれらを並列に配置して、「六宮」の住人である宮女たちを表す。ここに、彼女たちが入念に「粉」「黛」を施している姿まで見るのは、筆者の読み過ぎであらうか。しかし、このように考えれば、宮女たちの人為的な努力によって作られた美と、これを圧倒する楊貴妃の「天生」の美との対比的な構図が見えてくるのである。

今、冒頭8句のみを取り上げたが、この数語のみでも、それぞれの語が有機的に働きながら、内容が展開してゆくことが窺われるであらう。

以上のように、文中に登場する熟語も、その構造を細かに考えてみる価値はある。その繰り返しの先に、より複雑な分析にも耐えうる文構造への理解が定着するであらう。

なぜ漢文を学ぶのか、連綿と繰り返されるこの問いかけは、今日ますます切迫の度合いを強めている。この問いに對して、筆者は「思考力を伸ばすため」と回答したい。『高等学校学習指導要領』に説く国語科の目標には「思考力や想像力を伸ばす」ことが掲げられている(11頁)。その場合、

漢文において受け持つことができる思考力の養成は、究極的には、語と語との関係を考えるところに帰着すると思われる。本稿が、思考力を伸ばす漢文教育の一助になれば幸いである。

注

(1) つとに小川環樹・西田太一郎『漢文入門』(岩波書店、一九五七年第一刷。本稿では二〇〇〇年第四刷を参照)において、そうした解説法がおこなわれている。なお、本稿では、「構造」をstructure(要素のどのような組み合わせか)、「構成」をelement(どのような要素の組み合わせか)の意で用いる。

(2) 田部井文雄「入門」(鎌田正編『漢文教育の理論と指導』大修館書店、一九七二年。第二編 教材論。100～110頁。のち、田部井文雄編『漢文教育の諸相研究と教育の視点から』大修館書店、二〇〇五年)を参照。

(3) 江連隆『漢文教育の理論と実践』(大修館書店、一九八四年。二、漢文教育の理論と実践 第二章 指導内容 5 熟語の構造。172～176頁)を参照。なお、同書では、目的語と補語とを合わせて「補足語」と呼んでいる。本稿も、同書に従う。

(4) 複数の大学で調査を行なった。学年別の内訳は、4年生 4名、3年生 14名、2年生 64名、1年生 26名。なお、全員に對して調査の趣旨を説明した上で、調査に協力することの承諾書を得た。ここに記して感謝します。

(5) 「好」が「このむ」意であり、「悪」が「にくむ」意であることを、語注として附した。また、難度を高めるため、「我」字を省略したものを、調査協力者に提示した。また、この章が教科書に載録されていないことも、理由のひとつである。

(6) この観点にかかわらずミスは、無視した。

(7) 但し、正答率の伸びへの影響については、他の方法と比較した上での今後の検証を俟つ。

(8) Aの17名には、一部の内容を覚えていると回答した者も含む。

(9) 小学校国語教科書は平成27年度版、中学校国語教科書は平成28年度版を参照した。各社の配列は五十音順とする。

(10) 教育出版・桐原書店・三省堂・数研出版(新課程のみ)・第一学習社・大修館書店・筑摩書房・東京書籍・明治書院・右文書院(旧課程のみ)各社の新課程用12種及び旧課程用17種の『国語総合』教科書を参照した。

(11) 『後漢書』党錮列伝(李膺伝)に、「是の時朝廷日々に乱れ、綱紀地に類おつつ。(李)膺独り風裁を持し、以て声名自ら高し。士の其の容接を被る者有れば、名づけて龍門に登ると為す(是時朝廷日亂、綱紀頽地。膺獨持風裁、以聲名自高。士有被其容接者、名爲登龍門)」とある。また、その李賢注に引く辛氏『三秦記』に、「河津一に龍門と名づく。水險しくして通ぜず、魚鼈の属能く上る莫し、江海の大魚龍門の下に薄集すること数千、上るを得ず、上れば則ち

龍と為る(河津一名龍門、水險不通、魚鼈之屬莫能上、江海大魚薄集龍門下数千、不得上、上則爲龍)」という。

(12) 遠く博士家の系統に連なる阿佐井野版『論語』(清原宣賢跋、天文二年(一五三三)刊。国立国会図書館蔵)や、同じく博士家の読み方を受け継ぐ北野宮寺学堂蔵版『論語集解』(嘉永元年(一八四八年)旧鈔本模刊)では、述語+補足語の構造として読んでいる。ともに古注の解釈に拠ったものである。今、これに従う。

(13) 「長恨歌」が恋愛や「風流」を重んじる当時の価値観を背景に成立したことは、諸田龍美「『欧陽詹』事件から見た『鶯鶯伝』の新解釈―中唐の『尤物論』をめぐる」(『日本中国学会報』第49集、一九九七年)、同氏「好色の風流―『長恨歌』をささえた中唐の美意識―」(『日本中国学会報』第54集、二〇〇二年)を参照。いづれも同氏「白居易恋情文学論長恨歌と中唐の美意識」(勉誠出版、二〇一一年)所収。

(14) 同時に、このような漢文における訓練が、日常用いられる漢字や熟語の理解にもプラスに働く。このことについては、寺門日出男「国語教育と漢文訓読」(田部井文雄編『漢文教育の諸相研究と教育の視座から』大修館書店、二〇〇五年。第一章 漢文へのいざない「漢文訓読の現在」51〜55頁)を参照。